複文と視点

――中国語の複文における視覚表現の「視点明確化機能」――

張　佩　茹

1. はじめに

1－1. 問題提起

複文の形で「発見」や「原因」を表すとき、中国語ではしばしば視覚表現を用いる。例えば、

(1) 他刚刚走到街角，就看见[1] 她从银行里出来。（巴金《寒夜》1）

(2) 现在，老伴见他从多年的苦闷里找到一种精神的寄托，心中深感安慰。（冯骥才《雕花烟斗》2）

(1) の“看见”は本義の「見える」の例で、“她从银行里出来”は「彼」による発見を含意するが、(2) の“见”は単なる視覚による感知だけではなく、“见”の内容を後続の“心中深感安慰”の《原因》として取り上げる意図も含まれている。“他看见她从银行里出来”は単文として成立するが、“?老伴看见[2] 他从多年的苦闷里找到一种精神的寄托”は単文としての座りが悪い。後に“心中深感安慰”のような《結果》をつけることによって、初めてこの文が完全な意味を成すことができる。このことから (2) の“见”は広義に原因を表す機能を担っていると見られる。ここでの“见”には「目に見える」ことから「心に見える」ことへの意味的拡張が見られるほか、《原因》を表す接続詞的機能への文法的拡張も確認できると考えられる。

本稿では、(1) と (2) における視覚表現の働きは視覚表現の「視点明確化機能」から生じたものである、と考える。視点を明確にすることによって、誰からそう見えているかが明白になるので、それがゆえに視覚表現が視点人物の「発見」や動作行為の「原因」を表現することと密接な関連性を

持っている、と考えられるのである。

複文における視覚表現の役割は、中国語の文構造の特徴を理解するための、一つの重要な手がかりになる。単文なら視点が分かりやすいものの、複文になると、特に複数の登場人物が現れた場合、特定の登場人物の視点が中心になっているか、それとも複数の人物の視点が平等に扱われているかが問題になってくる。管見の限り、中国語の複文に関する先行研究で視覚表現を取り上げたものは僅かしかない（原田 1997a&b を参照）。原田 1997b は複文に見られる中国語の視覚表現の用法について、興味深い言語事実を掘り起こしている。しかし、その分析にはまだいくつかの問題点が残っている。それらの問題点を踏まえながら、本稿は「視点」という観点から複文における視覚表現の「視点明確化機能」を検証して行きたい。

1－2. 用語の定義

本論に入る前に、まず「複文」、「視覚表現」及び「視点」を定義しておきたい。中国語において、複文とは複数の単文から組み合わされたもので、それらの単文の間に少なくとも一つのコンマが必要である。この定義の中にある単文が何かというと、単文の最も基本的な構造は「主語＋述語」とされている。したがって、『「主語＋述語」，「主語＋述語」』というのが複文の基本的形式である。単文と複文の区別について、邢 2001 に以下のような分かりやすい例文が挙げられている（括弧の部分は筆者による）。

(3) 山川明丽，景色迷人。（「主語＋述語」，「主語＋述語」）

(4) 山川景色，明丽迷人。（「主語」，「述語」）

コンマが入っている文でも、全体を合わせて単文の構造になっている場合、やはり複文とは見なさない。(3) は複文だが、(4) は単文である。これは明確な定義に見えるが、実のところ、単文か複文かを区別しにくい、中間的なものも少なくない。いくつか問題にされている構造のうち、ここでは本稿と関係あるものだけを取り上げることにする[3)]。例えば、(5) のような文がある。

(5) 无意间侧头一看，他正立在国际咖啡厅的玻璃橱窗前。(巴金《寒夜》25)

この文では主語が一回しか出ていないので、単文と見なすべきだという分析がある。しかし、(5) のような文を単文の範囲に入れると、不都合が生じる場合も少なくない。既知の主語を省略する傾向が強い中国語では、同一主語の省略は頻繁に行われる。(5) を単文と見なせば、単文の構造はとても複雑なものになってしまう。本論では (5) のように、同一主語に関して、コンマを隔てて複数の動作を述べている文を複文とみる。

次に、「視覚表現」とは“看见”“看到”“看”“见”といった、視覚を表す動詞や動補構造が含まれた表現のことを指すものとする。“看”と“见”は多義語だが、本論では主に“看”は「動作主が意識して何かを見る」という意味に、そして“见”は動作“看”の結果「何かが見える」という意味に限る。なお、「見える」や「見かける」などを意味する“看见”“看到”“见”の性質をまとめて論じるとき、本稿では「“看见”類視覚表現」という言いかたをする。

最後に、「視点」という言葉は宮崎・上野 1985,3 によると、一般に二つの意味で用いられる。一つは「どこから」見ているかの「どこ」、もう一つは「どこを」見ているかの「どこ」である。本論は宮崎・上野 1985 にならって、「視点」を「どこから見ているか」の「どこ」と定義する。また、「視点人物」とは、文の視点を有する人物である。

1－3. 視覚表現の「視点明確化機能 1」と「視点明確化機能 2」

原田 1997b は、知覚表現が複文の前半と後半のどちらに位置するかによって、「前件型」と「後件型」に分けて考察を行っている。その考察の結果、「前件型」では知覚表現の最も重要な役割は原因を表すことで、「後件型」では前件の主語に当たる人物の知覚であることを明示することという結論を示している。知覚表現というと、視覚、聴覚、嗅覚などが含まれているが、実際には視覚表現が最も頻繁に用いられており、そのことは原田 1997b で取り

上げられた21例のうち、視覚表現が16例を占めているという事実からも伺うことができる。本稿は考察の範囲を視覚表現に絞ることにする。

本稿では原田1997bの「後件型」にあたる視覚表現の機能を「視点明確化機能1」、そして「前件型」にあたる視覚表現の機能を「視点明確化機能2」と、それぞれ改めて呼ぶことにする。なぜなら、「前件型」にせよ、「後件型」にせよ、視覚による感知というところに共通点が見られるからである。視覚表現を用いることによって、誰からそう見えているかが明確になる、つまり視点人物の確立ができる。その点に着目して「視点明確化」という呼び方を提案したい。また、単に見えることを表す「視点明確化機能1」と、見えることから原因を表すようになる「視点明確化機能2」の間に、ある連続性を読み取ることができるので、それを「1」と「2」の関係で繋げて行きたい。

本稿の分類に従うと、冒頭にある例文（1）の“看见”が「視点明確化機能1」を持つ表現で、例文（2）の“见”が「視点明確化機能2」を持つ表現である。（1）も（2）も単一人物の視点で文の全体を貫くことに注目されたい。以下、「視点明確化機能1」と「視点明確化機能2」を詳しく考察する。

2. 視覚表現の「視点明確化機能1」：見えないもの・ことが見えてくる

2－1. 意識的に見ることと自然に目に入ること

まず、下の二例を参照されたい。

（6）他忽然警觉地回头去看，仍旧只看到那不很浓密的黑暗。（巴金《寒夜》1）

（7）我跨过门槛，就看见横在门廊尽处的石栏杆，和栏外的假山、树木、花草，同时也听见一片吵闹声。（巴金《憩园》3）

（6）と（7）で確認できるように、視覚表現が持つ「視点明確化機能1」が用いられる場面において、何かが見えてくる前に通常二つの状況が考えら

れる。つまり、(6) のような「動作主が意識して見ようとする」状況と (7) のような「場所の転換や今まで遮られた視界がひらけてくる」状況とである。二つの状況があるということについては、既に先行研究（原田 1997b, 費 2000）が指摘しているが、本稿では更に詳しく検証したい。

「視点明確化機能 1」を持つ視覚表現を用いる動機は明確である。それは、「動作主が意識して見ようとする」あるいは「場所の転換や今まで遮られた視界がひらけてくる」といった、まさに視覚に結びついている状況が存在するからにほかならない。まず、動作主の意識が働いている用例を見てみよう。この構文の特徴は複文の前件に“看”が現れることである。

(8) 编辑部主任兼代经理周 ×× 忽然在主任室里抬起头来，朝外面看，看见了他，也不说什么话，却露出一种轻视的表情。（巴金《寒夜》1）

(9) 我转脸看许立宇，看到他脸上浮起颇为得意颇为自负的神情。（王朔《许爷》）

前件の“看”にあわせて、後件にはしばしば“看见”“看到”、つまり“看”の結果を表す動補構造が用いられる。特に、後件に体詞性成分しかない場合は、“看见”“看到”が必須となる。(6) の“……回头去看，仍旧只看到那不很浓密的黑暗。”と (8) の“……朝外面看，看见了他……”はその例である。この二つの例文を少し書き換えて、日本語と比較してみれば、この特徴が一層明らかになる。

(10) 他回头去看，仍旧只看到那不很浓密的黑暗。

(11) 彼が振り返ってみると、やはりその濃くない暗闇だけだった。

(12) 编辑部主任抬起头来，朝外面看，看见了他。

(13) 編集部長が頭を上げて外に目をやると、彼がいた。

日本語の場合、「と」を使って後件が前件の主語による感知対象であることを表現するとき、「〜だ（った）」や「〜がいた」のようにコピュラ文や存在文のかたちで対象の存在を表現するだけで、「前件の主語による感知」ということが暗示されるが、中国語では「“看见”類視覚表現」を用い、誰か

らそう見えているかを明示する傾向が強い。

次に、「場所の転換」や「今まで遮られた視界がひらけてくる」といった状況に使う視覚表現の意味特徴を考察する。これらの用例は「動作主が意識して見ようとする」用例に比べて明らかに多く見られる。例えば、

(14) 我刚从石栏杆转进门廊，就看见周嫂给我送晚饭来，……。（巴金《憩园》10）

(15) 我连忙跑进婴儿室，看到百伦正双手叉腰站在栏杆已被砸坏的婴儿床前，俯视着刚满六个月的尖声啼哭的儿子。（严君玲《落叶归根》18）

(16) 我在我家那站地铁下了车，一下车就看见站台对面一张椅子上坐着一个男人在望着我。（王朔《玩的就是心跳》）

(17) 睡不着，我到门外去散散步。轻轻的开开门，我看见一个人紧靠着槐树立着呢！（老舍《四世同堂》11）

(18) 他侧过脸去，看见一团黑影蹲在那儿。（巴金《寒夜》1）

(19) 一天放学回家，一推开门，见一个农村打扮的女孩子坐在沙发上，睁大眼睛怯生生地望着我。（史铁生《爱情的命运》）

ある空間を離れ、別の空間に入ったときや、体の動きなどにより今まで視界に入らなかったものが目に入ったときに、視覚表現が重要になってくる。この構文には以下の三つの特徴がある。

第一に、事象と事象の間の密接な時間的継起を示す標識がしばしば用いられる。(14) と (16) の“就”がまさにそれに該当する。

第二に、(14) から (19) までの例文がすべてそうであるように、“看见”“看到”の内容は主語の人物にとって予想できなかった光景である。

第三に、(15)、(16)、(17)、(19) のように、視覚表現に続く部分に「事件が実現中である」ということを示す標識がしばしば用いられる。(15) には“正双手叉腰”と“俯视着”、(16) には“在望着”、(17) には“立着”、そして (19) にはまた“望着”という表現がある。

以上の事実をまとめてみると、これらの複文の後件で使われる“看见”

“看到”は「空間の移動や視界の移動により、あるものや実現中の事柄が不意に目に入った」ということを表していると言える。つまり、「不意の発見」を表しているということである。この「不意の発見」という意味は「“看见”類視覚表現」が非意志動詞だということに関連している、と考えられる。

前述したように、コーパスからは「空間の移動・視界の移動」に伴った視覚表現のほうが「意識して見ようとする」表現よりもはるかに多く検出される。それはわれわれの日常経験と関係があると言えよう。普段のわれわれの生活の中では、移動中は通常「意識して何かを見る」より、「不意に何かが見えてくる」ことのほうが多いはずである。次の用例でこのことを検証したい。

(17') “睡不着，我到门外去散散步。轻轻的开门一看，我看见一个人紧靠着槐树立着呢！”

(19') 一天放学回家，推开门一看，见一个农村打扮的女孩子坐在沙发上……。

(17) と (19) に“看”を加えた (17') と (19') は非文ではないが、文脈との間にギャップを感じる。(17') では外へ出て散歩することがドアを開ける目的であり、ドアを開けて何かを見て確かめることが目的ではないので、“轻轻的开门一看”という表現がやや不適切なわけである。また、(19') では放課後、家に着いてドアを開けるのは家に入るためであって、何かを見るためではないので、“推开门一看”というと、奇妙な文になってしまう。場所や視界の転換と共に動作主が意識して見ようとするには、何らかのきっかけになるものが必要である。例えば、(20) のようにドアをノックしている人がいるなどしてはじめて、「見る」という動作が適切になるわけである。

(20) 事过两个多月的一天晚饭后，有人敲着门。我出门一看，从没有点灯的走廊的晦暗中，透出一张苍白、无表情的脸。(冯骥才《我这个笨蛋》4)

以上、視覚表現による「視点明確化機能 1」の構文の構造的及び意味的特徴を観察した。次に視覚表現を用いない複文と比較しながら、視覚表現の

「視点明確化機能 1」による視点人物の確立という役割について考えてみたい。

2－2. 単一視点の維持

視覚表現を用いて視覚の感知を明示することは、「誰からそう見えているか」ということを明示することにほかならず、そのことは、同一人物の視点を維持することにもつながる。逆にいうと、視覚表現を用いなければ、同一人物の視点を語っているとは読み取りにくく、特に三人称の文体においては、複数の登場人物の行動を単純に相対的な時間関係で述べているものと解釈されかねない。次の用例を参照されたい。

(21) 丁二狗神清气爽地从茅房走回家，母亲王桂花已经做好饭一个人开始吃了。（丁新征《追杀丁二狗》）

(22) 他走进公司，两个同事坐在楼下办公桌前看报。
“怎么啦，老汪？你今天气色不好……”那个姓潘的年轻人带着讽刺的调子说。（巴金《寒夜》1）

(23) 丧胆游魂的，他走到小羊圈的口上，街上忽然乱响起来，拉车的都急忙把车拉入胡同里去，铺户都忙着上板子……。（老舍《四世同堂》8）

(21)（22）（23）では最初の登場人物がある場所に着くのを参照点にして、他の人物を登場させている。これらの例では、特定の人物の視点を表しているとは読み取りにくく、複数の事象を単に時間の流れに沿って描写しているものと考えられる。(21) では“丁二狗”が家に着いたら、お母さんが既に食事を始めていたこと、(22) では彼が会社の中に入ったら、二人の同僚が新聞を読んでいたこと、そして (23) では彼が“小羊圈”の入り口に着いたら、通りに突然騒ぎが起こったことを描写している。(23) では“忽然”を使うことにより、「突然性」を明確にしているが、(21) と (22) では後件が特に「予想外の事柄」として描かれてはいない。これは先に述べた「“看见”類視覚表現」がもたらす「不意の発見」の意味とは性質が異なる。

また、(22) では“他走进公司，两个同事坐在楼下办公桌前看报”の次の文が“姓潘的年轻人”の発言であることから、書き手が“他”の視点に密着していないことが伺われる。“姓潘的年轻人”は“两个同事”のうちの一人である。もしも“他”、つまり“老汪”と呼ばれる人物の視点から描くなら、例えば (24) のように「“看见”類視覚表現」を用い、さらに後続の文も“老汪”を主語に立てるのが最も自然であろう[4)]。

(24) 他走进公司，看见两个同事坐在楼下办公桌前看报。他向他们打了声招呼。

視覚表現を用いないタイプの複文のなかには、このほかに、明白に時間を表現する“时”を用いるものもある。例えば、

(25) 马青身心交瘁地回到公司办公室时，于观正被那汉子揪着脖领子在办公室里拖来拖去。(王朔《顽主》1)

(25) で確認できるように、視覚表現を用いない場合、前件は時間的参照点を示すことで、後件と緊密に結びついている。しかし、この場合も (21) から (23) までと同様に、後件が前件の主語の視覚感知の内容であるかどうかについては、関心が示されていない。

なお、一人称小説では、語り手（書き手）の視点がつねに一人称主語に同化されるという特殊事情のため、視覚表現を用いなくても、一人称主語の視点が複数の文にわたって貫かれるということが少なくない。(26) と (26') を比較されたい。

(26) 我来到隔壁屋，那对新人忙站起来，倒还不是邋遢人，都有点南方式的细致……。(王朔《玩的就是心跳》)

(26') * 小王来到隔壁屋，那对新人忙站起来，倒还不是邋遢人，都有点南方式的细致……。

(26) で分かるように、一人称の語りなら動作主を提示しなくても“倒还不是邋遢人，都有点南方式的细致”といった評価を下すことが可能であるが、(26') のような三人称の文では不適切である。このように、人称が絡む問題についてはなお検討を要する点も多いが、それについて稿を改めること

とし、ここではこれ以上触れないことにする。

以上、視覚表現を用いない複文と比較して確認できたのは、特に三人称の場合、視覚表現は「視点明確化機能 1」を以って、視点人物の存在を確立することにより、同一人物による単一の視点を維持することが可能になるということである。次に「視点明確化機能 2」について考察する。

3. 視覚表現の「視点明確化機能 2」：見えたもの・ことに何らかの影響を受ける

3－1. 原因マーカーへの意味的・文法的拡張

「視点明確化機能 2」とは、視覚表現を用いて、視点人物の行動や心理状態に影響をもたらす原因を示す機能である。日本語のシテ形接続を考察した仁田 1995 は、従属節の内容が知覚・認知の場合、それによって得られた情報・現象は主節を導き出す刺激だと解釈した上で、このような従属節と主節の間の関係を《契機》と見なし、さらに《契機》を〈時間的継起〉と〈起因的継起〉の中間に位置づけている。つまり完全な因果関係とは認めがたい性質があると言えよう。中国語においては、「視点明確化機能 2」を持つ視覚表現に《契機》の性質が見られるが、《原因》を明確にする例も少なくない。まず、《契機》を担う視覚表現の例を見てみよう。

(27) 谭丽脸蛋红扑扑地从窗外走过，看见我，敲玻璃嘴贴着玻璃喊什么。（王朔《玩的就是心跳》）

(28) 她一路喘着气，看见他站在那儿，向他打个招呼，就一直走到她丈夫的身边。（巴金《寒夜》1）

(29) 我走过大仙祠门前，看见门掩着，便站住推一下，门开了半扇，里面没有一个人。（巴金《憩园》19）

ここでの“看见”の内容は、主語の人物がその次に取る行動と密接な関係があるが、因果関係とは言いにくい。そのことは、原因を尋ねる疑問詞“为什么”を使った（27'）、（28'）、（29'）がいずれも不自然であるという事実か

らも明らかである。

(27') 谭丽为什么敲玻璃? --?因为她看见了我。

(28') 她为什么向他打招呼? --?因为他站在那儿[5]。

(29') 你为什么推了门? --?因为门掩着。

このことから、(27) から (29) までは“看见”に後続する内容とその後の事象の間に因果関係があるとは考えにくい。それよりも、むしろ“看见”の内容が、後続する行為の《契機》を表していると見たほうが妥当であると思われる[6]。(27)、(28)、(29) の三例とも主語の人物が場所移動したのちに何かを見かけ、それによってある行動を取っているという点に注目されたい。

一方、“看见”に続く内容が《原因》を表すと考えられるケースも存在する。

(30) 我看见旁边没有别人，决定趁这个机会向他打听杨家小孩的事。(巴金《憩园》10)

(30') 你为什么决定向他打听杨家小孩的事? -- 因为旁边没有别人。

(30') の“为什么”を使ったテストからも明らかなように、(30) の“看见”に後続する“旁边没有别人”は“向他打听杨家小孩的事”という決定に踏み切った原因を表していると考えられる[7]。《契機》よりも強い因果関係が見られる。

また、通常、単文だと「“看见”類視覚表現」などと結びつきにくい文でも、ある結果を引き起こす原因として扱う場合には、「“看见”類視覚表現」との共起が自然になる。例えば、

(31) 张莉丈夫见我非要走就叫张莉送送我关切地对我说“不行别硬撑着”。(王朔《玩的就是心跳》)

(31') * 张莉丈夫见我非要走。

(32) 师姐见我自愿找上门来和她合作，眼睛都喜得眯成了一条缝……。(袁冬霖《我说爱情应该是个变量》)

(32') * 师姐见我自愿找上门来和她合作。

(33) 老姚看见我不答话，便伸出左手在孩子的背上推一下，说："你走过去一点，让黎叔叔看清楚！"（巴金《憩园》7）

(33') ＊老姚看见我不答话。

(34) 小顺儿的妈……看到大家都快活，她便加倍用力的工作……。（老舍《四世同堂》10）

(34') ＊小顺儿的妈看到大家都快活。

これら視覚表現が述語である節は、単独では文として成り立ちにくい。それに対して、(27) から得られる"谭丽看见了我"や (29) から得られる"我看见门掩着"は単独でも完全な文になりうる。どこが違うかというと、(31) から (34) までは視点人物がある行動を取る、或いはある感情を持つことの原因となる自覚的な事柄を取り上げているのに対して、(27) から (29) までは無自覚的に目に入ってくる物事の静的・動的存在を述べている。後者に比べて、前者のほうが主観性が強いと言えよう。目に見える物事の意味を読み取り、それに応じて次の行動を取るといった、視点人物の主体的参与が見られる。例えば、(31) の"非要"や (32) の"自愿"などには、視点人物の「判断」が含意されている。

(35) から (40) までの例に見て取れるように、単純な視覚感知を表す場合の視覚表現は、"清清楚楚地"や"模模糊糊地"など、どう見えているかを修飾する副詞成分と共起することが可能であるのに対して、視点人物の主観的な理解が絡んでいる場合の視覚表現は、これらの副詞とは共起しにくい、もしくは共起しない。

(35) 她清清楚楚地看见了我。

(36) 我模模糊糊地看见门掩着。

(37) ?我清清楚楚地看见她的神色不大对。

(38) ?我模模糊糊地看见旁边没有别人。

(39) ＊他清清楚楚地看见我非要走。

(40) ＊他模模糊糊地看见我不答话。

このような「はっきり」や「ぼんやり」を意味する副詞成分との共起可能

性の程度差から「“看见”類視覚表現」に後続する内容には、単なる視覚による感知を表すものと、視点人物の理解もしくは判断の内容を表すものといった、連続性のある二種類の内容があるということが伺える。すなわち、実際に見えたことから主体的に判断されたことまでの連続性である。視点人物の理解や判断が要求される「抽象的に見える」ことであれば、単文としては成立しがたく、かつ《原因》として用いられる傾向が強くなる。この時の視覚表現は原因を表す接続詞的機能を獲得していると言えよう。「視点明確化機能 1」を担う視覚表現が最も動詞性の強い用法で、「視点明確化機能 2」になると、《契機》を表すときにはまだ動詞性が強いと言えるが、《原因》を表すときには、視覚表現の動詞性が弱まっている。以上の議論は、下のように図式化することができる。

「視点明確化機能 1」＞「視点明確化機能 2《契機》」＞「視点明確化機能 2《原因》」

動詞性強 ←――――――――――――――――――――――――→ 接続詞性強

このように「視点明確化機能 2」を担って、特定の人物が何らかの契機もしくは原因となる行動を取る、或いはある感情を持つときの視覚表現は、その人物の視点を複数の文にわたって一貫させるという点で、複文上のきわめて重要な連結機能を担っている。先の（28）、（30）、（34）から下線部の視覚表現を落とした（28”）、（30”）、（34”）は明らかに不自然である。

（28）她一路喘着气，看见他站在那儿，向他打个招呼，就一直走到她丈夫的身边。

（28”）＊她一路喘着气，他站在那儿，向他打个招呼，就一直走到她丈夫的身边。

（30）我看见旁边没有别人，决定趁这个机会向他打听杨家小孩的事。

（30”）＊旁边没有别人，我决定趁这个机会向他打听杨家小孩的事。

（34）小顺儿的妈……看到大家都快活，她便加倍用力的工作……。

（34”）＊大家都快活，小顺儿的妈便加倍用力的工作……。

因果関係を表現するには視覚表現のほかに、接続詞“因为”を使用するこ

とも可能である。たとえば、

(30‴) 因为旁边没有别人，我决定趁这个机会向他打听杨家小孩的事。

だが、大河内 1967 でも既に指摘されているように、中国語では論説や論文の類なら関聯詞（接続詞と連接関係を表す副詞）を用いるが、小説ではあまり見かけない。実例を見ると、(30‴) ならまだ自然な文であるが、(34) の用例の場合、“因为”で書き換えることができない。

(34‴) ＊因为大家都快活，小顺儿的妈便加倍用力的工作……。

“小顺儿的妈”がいつにも増して仕事に励むのは“看到大家都快活”だからであり、“大家都快活”ということが彼女の目に映ったということを表現してこそはじめて、そのことが彼女の行動の引き金になっているという読みが可能になる。

また、“因为”や“所以”を使って表される因果関係とは、「誰による判断なのか」ということを考えてみると、それは書き手や語り手による判断であることに気が付く。“因为”や“所以”を使うと、その場での出来事というより、事件の後に書き手が前後の因果関係を加えて書いたように理解されてしまう。あらゆる事件があたかも実況中継的に描かれる小説においては、書き手による判断の混入は不適切に感じられる場合が多い。中国語の複文において視覚表現が頻出する原因はそこにある、と考えられる。関聯詞を使わずに事象と事象の因果関係を表現するには、基本的に「何かが見えた」、そして派生的に「何かを感じ取って理解する」という意味を持つ視覚表現こそが相応しいと言えるのではないか。次の (41) では《原因》をマークする視覚表現の後に長い文が続いても、その全体が視覚表現により《原因》として一つのまとまりになっている。単一視点の維持において、視覚表現がいかに重要かが伺える。

(41) 他的火气是逐步上升的，开始还较为克制，没有十分用力，但他看到马锐就是不肯服软，始终挺身站在那儿，不管他怎么打不动也不吭声，甚至连哭都不哭，凝视着他的眼睛里流露出毫不掩饰的轻蔑，便被一点点彻底激怒了。（王朔《我是你爸爸》4）

以上の論点をまとめてみると、「視点明確化機能2」、つまり「見えたもの・ことに何らかの影響を受ける」というのは、同一視点を維持することにより、視点人物の行動や心理状態に影響を及ぼす物事とその結果を明示することであると言える。視覚表現に後続する成分は、単純な視覚による非自主的な感知の内容もあれば、視点人物の理解や判断が加わるものもある。視覚表現が用いられた前件は後件にとって、一種の《契機》を表し、関連性のより強い場合は《原因》を表していると考えられる。

3－2. “看”と“看见”の置き換え許容度

単文においては、“看”は「見る動作」を表し、“看见”は「何かが目に入ることや見る動作による結果」を表す。両者は使い分けをしなくてはならない。例えば、

(42) 张三昨天看了一部电影。

(42') ＊张三昨天看见了一部电影。

(43) 李四看见前面站着一个人。

(43') ＊李四看前面站着一个人。

だが、「視点明確化機能2」の構文においては、“看见”を“看”で置き換えることが可能である。「視点明確化機能2」とは「見えたもの・こと」に何らかの影響を受けることで、この「見えた」に相当する表現は“看见”のはずだが、実際の用例を見てみると、“看”を用いている文も少なくない。“看”は“看见”より自主性が強く、“看”を使うことで主観性が強まると考えられる。「視点明確化機能2」を果たす視覚表現が単なる《契機》から意味的・文法的拡張を経て《原因》をマークするようになるという点においても、主観性の増強が見られるので、“看”が用いられる条件が整っていると言えよう。以下、「視点明確化機能2」を担う視覚表現が含まれた複文において、“看”と“看见”の置き換えが可能であるという現象について論じる。

「視点明確化機能2」の構文において、視覚表現に後続する部分が明らかに主観性の強い評価や個人の判断を表す用例がある。

（44）“爹起初不肯，后来我看见爹实在很累，就把他拉进屋去了。”（巴金《憩园》27）

（45）直到一点，我看贾玲实在困了，也没情绪再下，就让她走了。（王朔《过把瘾就死》）

（46）“我看他做事忠心，也不忍心多责备他。”（巴金《憩园》5）

（47）……那帮男的没一个凑趣的，都挺冷淡，我看没戏就自己给自己找了个台阶下来走开[8]。（王朔《玩的就是心跳》）

視覚表現に後続する部分は、自主性が高まれば、《原因》を表す機能も強まるということは既に前節で論じた。自主性が高いがゆえに、意志動詞“看”と結びつきやすくなると考えられる[9]。

（44）では“看见”が使われているが、（45）で“看”が使われているのと比べて、（44）のほうが自主性が若干弱く感じられる。逆にいえば、“看”を使うと、視点人物の自主性が強調される。自主性の程度こそ変わるが、（44）の“看见”は“看”に置き換えることができる。同じように、（45）の“看”を“看见”に置き換えることも可能である。他の例をみてみると、（46）の“我看他做事忠心”は“我看见他做事忠心”に置き換えることも可能であるが、前者が判断をする意味を伴っているのに対し、後者は“他做事忠心”を事実として受け取るというニュアンスが強くなる。だが、（47）の“我看没戏就自己给自己找了个台阶下来走开”の場合、“没戏”は個人の判断であり、決して何かを視覚的に見たということではないので、“*我看见没戏……”と置き換えると不適切に感じられる。ここに（47）の主観性の強さが伺われる。

（44）から（47）までは主語が一人称の例文を挙げているが、三人称が主語の場合でも原因を表す“看”の使用が可能である。

（48）这时候，学校当局们看上海的战事既打得很好，而日本人又没派出教育负责人来，都想马上开学，好使教员与学生们都不至于精神涣散。（老舍《四世同堂》13）

（49）今天，看瑞宣的神色不大对，他很快的闭上了嘴。（老舍《四世同

堂》8)

(50) 祖父说完了，看我还是不很高兴，他又赶快说……。(萧红《呼兰河传》3)

これらはいずれも三人称が主語である例文だが、“打得很好”、“神色不大对”、“不很高兴”などに見られる「評価」や「判断」の意味において、主語の積極性が意志動詞“看”によって際立っている。

上述したように、因果関係で結んでいる複文においては、“看”と「“看见”類視覚表現」の間で置き換えの許容度が高くなっている。ただし、“看”は視点人物の自主性に焦点を当て、“看见”は物事を事実として受け入れるというところに差異がある。このような“看”と“看见”の置き換え可能性については、「評価」や「判断」が後続する“看”のほかに、「見える」ことが後続する“看”にも類似現象が見られる。単文なら必ず“看见”を使うところを、複文では“看”の使用が許容されるという例が存在する。(51)と(52)の用例を参照されたい。

(51) 她心情愉快地回到自己的房间，看两个小孩正拿着笛子发呆，便说:“再吹一遍，刚才那遍我没听清。”(王朔《无人喝彩》)

(51') * 她看两个小孩正拿着笛子发呆。

(51") 她看见两个小孩正拿着笛子发呆。

(52) 我一看他出去，我赶快的登着箱子就下来了。(萧红《呼兰河传》6-11)

(52') * 我看他出去了。

(52") 我看见他出去了。

(51)と(52)からも明らかなように、“看”にも原因をマークする接続詞的な用法が生まれている。

“看”と“看见”が置き換えられる現象は費2000でも論じられている。そこでは、因果関係のある複文においては“看”と“看见”が置き換え可能になるが、“看”には「意識的」かつ「口語的」、“看见”には「無意識的」かつ「文語的」という言外の意味が含まれると説明されている。基本的にこの

説明は妥当であると思われる。ただし、因果複文の前件に使われる“看见”や“见”などの「“看见”類視覚表現」は完全に「無意識的」だとは言い切れないことに留意したい。視点人物が物事を見て、理解して、さらに相応しい行動を取るという主体的な部分は見落としてはならない。「視点明確化機能2」を果たす「“看见”類視覚表現」は単に「見かけた」場合もあるが、「観察」や「判断」を含めている場合も少なくない。

また、「視点明確化機能2」を担う“看”と“看见”があらゆる場面で置き換えられるとは限らないことにも注目すべきである。例えば、(47) の“我看没戏就自己给自己找了个台阶下来走开”の“我看”は“我见”に書き換えることができない。なぜなら、“没戏”は極めて主観的な判断なので、この状況には自主性の高い“看”しか相応しくないからである。逆に、下の (53) の文では“见”を“看”に置き換えることができない。

(53) 老花农一见这烟斗，眼睛像一对灰色的小灯泡亮了起来。（冯骥才《雕花烟斗》）

(53') ?老花农一看这烟斗，眼睛像一对灰色的小灯泡亮了起来。

“老花农”は自主的にパイプを見たのではなく、見せてもらったところ、目がきらきらしたのである。この状況に相応しいのは“见”である。簡単にまとめてみると、《契機》、つまり「あるものを目にして、それが動機となって何かをする」場合、「“看见”類視覚表現」が最も相応しい。そして、強い主観性をそなえる《原因》を表す場合には、“看”が最も適切である。その中間にあたる状況において“看”と「“看见”類視覚表現」の置き換えが可能になるのである。

「視点明確化機能2」にみる“看”と“看见”の置き換え許容度は、もともと「“看见”類視覚表現」を使うべきだったところに意志動詞“看”を用いることができるようになったということから来ている。この現象からも「視点明確化機能2」による《原因》をマークする視覚表現の主観性の増強が確認できる。

3－3. 英語との比較

他言語をみると、中国語のみならず多数の言語で視覚表現から《原因》マーカーへの拡張が確認されている（Heine et al 1991, 201）。その拡張のプロセスは一般的に「視覚感知（visual perception）＞了解（intellectual perception）＞原因・理由（cause/reason）」であるとまとめられている。中国語の視覚表現もこのプロセスを経て、《原因》をマークする機能を獲得していると言えるが、この拡張は複文という構文においてだけ形成されているという点は注目に値する。中国語では単文に用いられる「“看见”類視覚表現」は「了解」を表すことが少なく[10]、英語の“I see”で「なるほど」、“I see what you mean”で「言いたいことがよく分かった」のような“see”の用法は中国語の“看见”に直訳できない。このことから複文という構造が中国語の視覚表現の意味的・文法的拡張に重要な役割を果たしていることが分かる。

その一方で、中国語では《原因》をマークする視覚表現の適用範囲に制限がかかっていることにも注意されたい。《原因》をマークしながらも、中国語の視覚表現は依然として強い動詞的性質を保っている。つまり、“因为”のような完全な《原因》を表す接続詞になり切っていないということである。具体的にいうと、視覚表現がマークする《原因》は視点人物の目で確認できるもの・こと、あるいは視点人物の判断に限られる。あくまでも「見える」や「そう見ている」といった動詞的性質が根強く残っているのである。英語の“seeing that”と比較すれば、中国語の視覚表現が《原因》をマークするときにどのような制限がかかっているかが明らかである。

英語では“seeing that”は接続詞になっており、「理由」（cause）を表す（Quirk et al 1985）。“seeing that”の節に入るものは、「見えるもの・こと」から視覚と関連性の薄い状況まで、連続性がみられる。例えば、

(54) Seeing that I was covered with dust, she brought a bowl of hot water[11].

(55) I am just ringing to check everything's OK, seeing that it's Crime

Prevention Week.

(54) を中国語で“她看见我全身满是尘土，就捧了一盆热水过来”と訳せるように、この場合の“看见”は“seeing that”に対応するが、(55) では“seeing that”に後続する部分は視覚による感知でも判断でもないため、“看见”では対訳できない。ここは“因为”や“由于”を使うべきところである。また、“seeing that”は完全な接続形式なので、(55) のように複文の後件で用いることもできるが、中国語では、《原因》をマークする視覚表現が《結果》を表す節の後に置かれるときは、“因为”を加えなければならなくなる。下の (56) を参照されたい。このことからも、中国語の視覚表現の《原因》マーカー機能に制限があることが明らかである。

(56) ……我没有把话说完又咽下去了，因为我看见他后面还有一个穿淡青色旗袍、灰绒线衫、烫头发的女人，和一个抱着被褥的老妈子。(巴金《憩园》4)

以上、英語との比較を考察したが、広く言えば、通言語的に視覚表現は《原因》のマーカーへの文法的拡張を起こしやすいことが確認されている。多数の言語でこの文法化現象が見られるということで、言語における共通の認知的動機が確認できるであろう。しかし、その一方、文法化の程度に差異があることも認めざるをえない。中国語の複文における視覚表現の《原因》をマークする機能の特徴は次のようにまとめることができる：複文構造で生成され、《原因》と《結果》の前後の順序が固定しており、視覚表現の動詞的性質がまだ強く残っている。

4. おわりに

最後に、中国語にはなぜ視覚表現を使って視点を明確にする傾向があるのかということを考えてみたい。原田 1997b は、日本語の小説の中国語訳で見られる知覚動詞の付け加えが「中国語の方は人物の外面からの叙述になっている」ということを裏付けていると説明している。だが、中国語の特徴を考えた上で、本稿では違う見方をとりたい。

原田 1997b で取り上げられた例文を日中両言語で照らし合わせると、日本語のある特徴に気がつく。日本語では「は」と「が」を使って主題と主語を区別することができるが、中国語にはこのような標識が欠けているのである。野田 1996 は従属節にかかっている主格は「が」、主文にかかっている主格なら「は」でマークすると分析している。つまり、「は」と「が」の使い分けで複数の登場人物の関係を明確にすることができると言えよう。「は」がついた登場人物の視点は複文全体にかかる。

その一方、中国語には「は」のような明白な標識が存在しないため、主題を表すときは他の手段を用いなければならない。通説では語順がその一つの手段となる。「主語＋述語＋目的語」が中国語の基本の語順で、「目的語＋主語＋述語」の文の場合、その目的語が主題化されていると言える、ということである。しかし、主語が同時に主題である場合、語順という判断基準だけでは判別できない。文脈や発話状況などを考慮しなくてはならない。

本稿の考察対象である中国語の複文において、複文全体の視点を維持するには、何が必要になるのだろうか。複数の人物が登場する場合、それぞれを主語の位置に立たせると、人物の関係が並列や対比になりがちで、単一人物の視点を際立てることが困難になる。このような構文の制限がかかっているため、中国語では視点人物以外の登場人物をなるべく主語に立たせないようにしている、と考えられる。原田 1997b の例文を見てみよう。(57') と (58') はそれぞれ (57) 及び (58) を書き換えた文であり、(57) と (57')、そして (58) と (58') の違いが以上の論点を裏付けていると言ってよい[12]。

(57) “呔，你往哪儿逃！”家仆见老太婆在尸体之间连跌带爬地想夺路而逃，便上前挡住去路，开口骂道。

（「おのれ、どこへ行く。」下人は、老婆が死骸につまずきながら、あわてふためいて逃げようとする行く手をふさいで、こうののしった。）（芥川龍之介《羅生門》）

(57') 老太婆在尸体之间连跌带爬地想夺路而逃，家仆上前挡住去路，开口骂道“呔，你往哪儿逃！”。

(58) 我看见他用手揩眼睛，觉得心里不痛快，站起来，默默地在屋里走了几步。(巴金《憩园》)

(彼が手で目をぬぐっているので、私は憂鬱になり、立ち上がって黙って部屋の中を歩いた。)

(58') 他用手揩眼睛，我觉得心里不痛快，站起来，默默地在屋里走了几步。

(57) では下人が複文全体の主語となっており、下人の視点が文の全体を貫いている。下人が主語でもあり、視点人物でもあると言えよう。老婆が逃げようとすることは下人の目を通して表現されている。それと対照的に(57') では老婆も下人も共に主語に立っているため、老婆の視点も下人の視点も全文にかかっていない。下人と老婆の動作をそれぞれ描写した文になっている。また、(58) と (58') を比較してみると、(58) なら「彼」が目をぬぐっていることが「私」の憂鬱さの原因だと分かるが、(58') のような文は、前件と後件の関連性が明示されていないため、別々の事象だと捉えられがちである。(57) と (57')、そして (58) と (58') を比較して分かるのは、全文を一貫した視点から語るために、中国語では主語を一つに限る必要があるということであろう。このときの主語は視点人物でもある。単一の視点で貫くために、視覚表現を使い、他者が行った動作を視点人物が見たもの、感じ取ったものとして表現するわけである。この特徴は「視点明確化機能 1」にも「視点明確化機能 2」にも見られるものである。

本稿の考察の結果として、中国語の複文における視覚表現の「視点明確化機能」は以下のようにまとめることができる。

1.「視点明確化機能 1」：複文における、“看”は「誰が見ているか」、また「“看见”類視覚表現」は「誰からそう見えているか」を明示するので、視点人物の確立や全文を一貫した視点で語るときに欠かせないものである。複文で視覚表現を用いることによって、他者の動作・行為は視点人物が感じ取ったこととして理解されるので、単一視点を維持することや「発見」を表すことができる。

2.「視点明確化機能2」:「見えたもの・ことによって、何か行動を取る」といった、《契機》と《行動》、関連性の強いときは《原因》と《結果》を表現している。視覚表現は《契機》や《原因》をマークする機能を担っている。《原因》をマークする視覚表現には、《原因》マーカーへの文法化という現象が見られるが、なお動詞的性質が強く残っているため、完全な《原因》接続詞にはなり切っていない。

中国語でしばしば視覚表現が用いられるということは、視覚表現が持つ機能の多様性を物語っている。そして、それらの視覚表現は、意味的にも文法的にも拡張を呈するのである。意味的拡張は単文において確認できるが、文法的拡張は複文の構造で用いられることによって、初めて見出せるものだ言えよう。そして本文で触れたように、視覚表現の意味的・文法的拡張は、その拡張の方向や文法化の程度差こそあれ、中国語のみならず、他言語でも既に確認されている現象である。

複文構造では、本稿で取り上げたもののほかにも、“只见”のような興味深い機能を発揮する視覚表現が存在する。それらの機能と意味的・文法的拡張に関する問題については今後の課題としたい。

注

1) 説明を加えない限り、用例の下線部は本稿の筆者による。
2) “看见”の意味を持つ“见”はやや文語的で、単文では一般的に“看见”を使う。
3) 単文か複文か判別しにくい中間的な構文について、詳しくは邢2001, 558-565を参照されたい。
4) しかし、一般的にみると、文と文とが必ずしも密接な関係で結ばれているとは限らないので、この説明は厳守すべき規則というより、傾向と見たほうが適切であろう。
5) 知り合いを見かけたら挨拶するのは一般的な常識なので、この二つの事象間に因果関係があるとは言いにくい。白川1995では、「12時になったから、ご飯にしよう」の「12時になる」と「ご飯にする」には「12時になったら、ご飯にする」という条件文があらかじめ存在するので、ここの「から」は理由を表さないと分析している。(28') の因果関係の不自然さを説明するときにも、この分析はあて

はまると考えられる。

6) 先行研究（原田 1997b, 費 2000）では、前件に視覚表現が用いられる複文においては、前件と後件に因果関係があると指摘されているが、因果関係の強弱の差については言及されていない。

7) 普通、「誰もいない」ことを表現するとき、わざわざ“看见没有人”とは言わない。例えば、“我站起来，走到门口往外看，走廊里没人。”（王朔《玩的就是心跳》）

8) 厳密にいうと、“我看没戏就自己给自己找了个台阶下来走开”は複文とは言えず、複文の意味を表す単文になる。いわゆる緊縮文である。しかし、“我看没戏，就自己给自己找了个台阶下来走开”のように、コンマを入れることも可能なので、ここではあえて例としてあげることにする。

9) “看”の主観性について、《现代汉语八百词》（吕叔湘主編 1999）によれば、“看”には「思う」の意味があり、この“看”は陳述文なら主語が一人称に限られ、疑問文なら主語が二人称に限られる。同書には“我看不会下雨，你看呢？”“我看，老袁的建议很好”のような例が挙げられている。つまり、この“看”は一般に会話の場面において、主観的に発言するときや、相手の意見を聞くときに使われる。また、“我看”や“你看”は挿入語ともされている（刘ら 1996:371）。「視点明確化機能 2」を担う“看”は二つの点において、挿入語に使われる“看”と異なる性質を見せている。まず、挿入語に用いる“看”には人称の制限があるが、複文で《原因》をマークする“看”は三人称でも使える。また、挿入語の場合は“我看，老袁的建议很好”のように、間にポーズを入れることがしばしばあるが、複文の場合はポーズを置かない。

10) ただし、文学作品では抽象的な「見る」の用例が見られる。王朔《我是你爸爸》から例をあげてみると、“马林生看到儿子眼中的不信任和怀疑。”という文がある。ここでは「了解」の意味を帯びているが、この場合でもやはり視覚による何か感じ取ったという意味が強いので、完全に抽象的な「了解」になり切ってはいないと思われる。

11) (54) と (55) は《Collins Cobuild 英语语法系列：9. 连词》（2000）の例文から引用している。

12) (57) 及び (58) の下線と対訳は原田 1997b による。

参照文献

大河内康憲 1967.「複句における分句の連接関係」,『中国語学』176：1-12 頁。

佐藤富士雄 2000.「主語、主題研究と中国語教育」,『中央大学論集』第 21 号：1-20 頁。中国関係論説資料 43-2（下）：306-315 頁。

白川博之 1995.「理由を表さない「カラ」」，仁田義雄編『複文の研究（上)』。東京：くろしお出版。

豊田豊子 1979.「発見の「と」」，『日本語教育』36 号：91-105 頁。

中川裕志 1997.「複文における因果性と視点—計算機で処理できるもの、できないもの—」，田窪行則編『視点と言語行動』。東京：くろしお出版。

仁田義雄 1995.「シテ形接続をめぐって」，仁田義雄編『複文の研究（上)』。東京：くろしお出版。

野田尚史 1996.『「は」と「が」』。東京：くろしお出版。

原田寿美子 1997a.「“只见”の機能について」，『名古屋学院大学外国語学部論集』第 8 巻第 2 号：51-65 頁。

----------1997b.「小説内に見られる“见”“看见”“只见”等の用法について—日本語との対応の観点から—」，『中国語学』244：124-131 頁。

費燕 2000.「中国語の「看」と「見」に関する一考察」，『大妻女子大学大学院文学研究科論集』10：1-12 頁。中国関係論説資料 42-2（上）：280-285 頁。

松木正恵 1992.「「見ること」と文法研究」，『日本語学』vol. 11, 8 月号：57-71 頁。

宮崎清孝・上野直樹 1985.『認知科学選書 I 視点』。東京：東京大学出版会。

渡邊亜子 2000.「「視点」再考—中国語の「視点」を表す言語形式—」，『調布日本文化』10：224-212 頁。中国関係論説資料 44-2（下）：170-176 頁。

曹逢甫著，谢天蔚译 1995.『主题在汉语中的功能研究—迈向语段分析的第一步』。语文出版社。

符淮青 1993.「“看”和“看见”等词义的同异和制约」，『汉语学习』第 5 期（总第 77 期）：1-5 页。

吕叔湘主编 1999.『现代汉语八百词（增订本)』。北京：商务印书馆。

刘月华 1986.「对话中“说”“想”“看”的一种特殊用法」，『中国语文』第 3 期：168-172 页

刘月华、潘文娱、故铧 1996.『实用现代汉语语法』（繁体字版)。台北：师大书苑。

邢福义 2001.『汉语复句研究』。北京：商务印书馆。

郑贵友 1998.「“视觉感知类”句子中动宾双系形容词状语—汉语状位形容词思考之一」，『汉语学习』第 1 期（总第 103 期）：24-26 页。

Chalker, Sylvia. 2000.『Collins Cobuild 英语语法系列：9. 连词』。北京：商务印书馆。

Heine, Bernd, Ulrike Claudi and Friederike Hünnemeyer. 1991. *Grammaticalization: A Conceptual Framework*. Chicago: the University of Chicago Press.

Quirk, Randolph. et al. 1985. *A Comprehensive Grammar of the English Language*. London; New York: Longman.

例文出典

《呼兰河传》萧红，黑龙江出版社 1979

《四世同堂》老舍，四川人民出版社 1979

《憩园》《寒夜》:《巴金全集第八卷》巴金，人民文学出版社 1989

《爱情的命运》:《史铁生作品第一集》史铁生，中国社会科学出版社 1995

《玩的就是心跳》王朔，作家出版社 1989

《过把瘾就死》《许爷》:《过把瘾就死》王朔，华艺出版社 1992

《无人喝彩》《我是你爸爸》:《王朔文集 3 矫情卷》王朔，华艺出版社 1992

《顽主》:《王朔文集 4 谐谑卷》王朔，华艺出版社 1992

《我说爱情应该是个变量》《追杀丁二狗》:《2003 中国年度最佳大学生作品》谢冕、朝全、玮清选编，漓江出版社 2004

《雕花烟斗》《我这个笨蛋》:《冯骥才中短篇小说选》冯骥才，中国青年出版社 1981

《落叶归根》严君玲，时报出版社 1999